

ごあいさつ

1万年にも及ぶ縄文時代は、今から約4,500年前の縄文時代中期に最盛期を迎えます。土器に反映された装飾は、炎や激しい水流を彷彿させ、現代に生きる私達の感性に揺さぶりをかけているかのようです。このような土器を製作し、縄文文化を最高潮にまで高めた人々がかつてこの盛岡の地で繁栄を極めていました。盛岡の奥座敷「繫」。現在は温泉街として賑わう地ですが、縄文の太古、のちに日本の縄文時代を代表する土器のひとつと評価された土器が製作されていました。今回の展示では昭和63年に国の重要文化財に指定された「深鉢形土器」7個体を中心に、繫遺跡から発見された貴重な遺物の数々を紹介し、厳しい自然環境を生き抜いた縄文人の美を感じて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の企画展を開催するにあたりまして、多くの皆様から御協力を頂戴いたしました。ここに、深く感謝の意を表すとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年10月

盛岡市遺跡の学び館
館長 杉本 浩

目次

- ごあいさつ
- 凡例
- 繫遺跡.....3
- 国重要文化財 深鉢形土器.....5
- 繫V遺跡を取巻く縄文土器.....10
- 高度な石材加工技術.....18
- 遠方からの文物.....20
- 盛岡の縄文時代中期土器研究史.....23

凡例

- (1) 本書は、平成30年10月6日(土)から平成31年1月20日(日)まで開催する遺跡の学び館第16回企画展「繫遺跡」の図録である。
- (2) 掲載資料及び展示資料は全て当館所蔵である。
- (3) 本企画展は遺跡の学び館館長杉本浩が総括し、企画・展示は多田秀明、室野秀文、菊地幸裕、津嶋知弘、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、鈴木俊輝、新井順、千葉貴子、今松佑太、上栞南の協力を得て、神原雄一郎、樋下理沙が担当した。

開催要項

会期／平成30年10月6日(土)～平成31年1月20日(日)
 会場／盛岡市遺跡の学び館 企画展示室
 主催／盛岡市遺跡の学び館
 協力／つなぎ温泉観光協会
 後援／岩手考古学会 岩手史学会 岩手日報社 朝日新聞盛岡総局 読売新聞盛岡支局 毎日新聞盛岡支局 河北新報社 岩手日日新聞社 盛岡タイムス社 産経新聞盛岡支局 時事通信社盛岡支局 共同通信社盛岡支局 デーリー東北新聞社 IBC岩手放送 NHK盛岡放送局 テレビ岩手めんこいテレビ 岩手朝日テレビ 岩手ケーブルテレビジョン エフエム岩手 ラジオ・もりおか アキュート マ・シェリ 情報紙ゆうゆう

特別講演会

講師／八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 参事 小保内裕之氏
 演題／「北東北縄文中期の土器」
 日時／平成30年11月11日(日) 午後1時30分～3時30分
 会場／盛岡市遺跡の学び館研修室

繫遺跡

重要文化財「深鉢形土器」の発見

繫遺跡は古くから土器や石器が出土することで有名な遺跡でした。全国的にひろく知られるようになったのは、昭和26年(1951)8月、繫小中学校(当時 岩手郡御所村大字繫字館市、御所中学校繫分校)校舎増築に伴う敷地造成工事の際に、縄文時代中期(約4,500年前)の底部穿孔土器が7個体出土したことによります。全て土器が逆さの状態であったと伝えられています。発見された7個体の土器の内3個体には、流麗な渦巻文が器面全体に描かれていました。その文様の美しさは、東北地方を代表する縄文土器の一つに数えられ、全国的に紹介されました。そして、これらの土器は昭和63年(1988)に国重要文化財に指定されるのです。

繫遺跡の発掘調査

昭和32年(1957)10月、校庭拡張に際して初の発掘調査が実施されました。発掘調査は盛岡市教育委員会と岩手大学によって行われ、縄文時代中期の竪穴建物跡7棟と縄文時代中期から後期にかけての土器や石器が数多く発見されました(昭和35年(1960)草間俊一、吉田義昭「岩手県盛岡市繫遺跡」盛岡市公民館)。
 昭和39年(1964)4月には、岩手大学の学術調査として実施されました。その後、昭和48年(1973)に御所ダム建設に伴う発掘調査が岩手県教育委員会により実施され、昭和58年(1983)より盛岡市教育委員会による発掘調査が現在も進められています。



繫遺跡の位置

昭和58年（1983）より個人住宅など各種開発に伴う事前の緊急発掘調査が盛岡市教育委員会で進められ、繫遺跡群（繫Ⅰ～Ⅶ遺跡）全体で平成30年度までに38次に及ぶ緊急発掘調査が実施されています。

発掘調査は繫Ⅴ遺跡が位置する、繫小中学校や周辺の住宅地で行われ、特に平成4～6年度の第13・15次発掘調査、平成8年度の第21次発掘調査、平成21年度に実施された第36次調査では、縄文時代中期初頭～末葉（約5,000～4,000年前）の竪穴建物跡が激しく重複した状態で発見され、長期間集落が継続していたことが明らかにされます。それまでの調査によって発見されていた竪穴建物跡や土坑などの遺構の分布状況から、繫小中学校を含む約46,000㎡の台地全体が、雫石川上流域を代表する縄文時代中期を中心とした大規模な集落であることが確認されました。

繫Ⅴ遺跡は、縄文時代中期を中心とした集落遺跡として有名ですが、人の営みは縄文時代早期（約8,500年前）の頃からありました。貝殻文土器と呼ばれる土器が、繫Ⅴ遺跡全体より破片で発見されています。縄文時代前期（約6,000～5,000年前）の土器も、破片で数多く発見されています。しかし、土器などの遺物はほぼ全て、縄文時代中期の遺構や捨て場と思われる場所から発見されています。それは、縄文時代中期の人々が集落規模を拡大した結果、地中に眠っていた中期以前の遺構や遺物を破壊したことを表しています。過去の痕跡を残さないほどの繁栄は、出土した土器やヒスイ・琥珀・アスファルトなど遠方よりもたらされた交易品からもうかがうことができます。

今回の展示では、繫で栄えた縄文人達が、現代に生きる私達に残した贈り物を、存分に見て頂きたいと思います。



竪穴建物跡

国重要文化財 深鉢形土器



国指定重要文化財 深鉢形土器

1号土器

総高50.2cm 口径30.4cm

胴径36.0cm 底径12.0cm

大木8 b式

胴部上半に最大径を持ち、口縁部が僅かに内湾し、胴部から底部にかけて、緩やかに窄まる完形の深鉢である。口縁は波状を呈し、器面は小渦巻文を介した2条1組の隆沈線で大きく縦に3区画され、区画内には大渦巻文が大胆に施される。

大小の渦巻文が交わる様子は、水流や流れる雲を連想させ、縄文人の世界観を現世に伝えているかのようである。

繫V遺跡を取巻く縄文土器



装飾突起付深鉢形土器
(大木7a式)

総高 (50.5) cm 口径58.7cm
胴径38.5cm 底径ナシ

隆線による文様と突起が一体となる意匠が口縁部に施される大形深鉢である。突起下は左右に短く伸びる隆線、下部は上下を区切る隆帯に交わる。左右を意識した文様は、あたかも腕をのばした人物を意匠したかのようなイメージを彷彿させる。

深鉢形土器 (大木7a式)

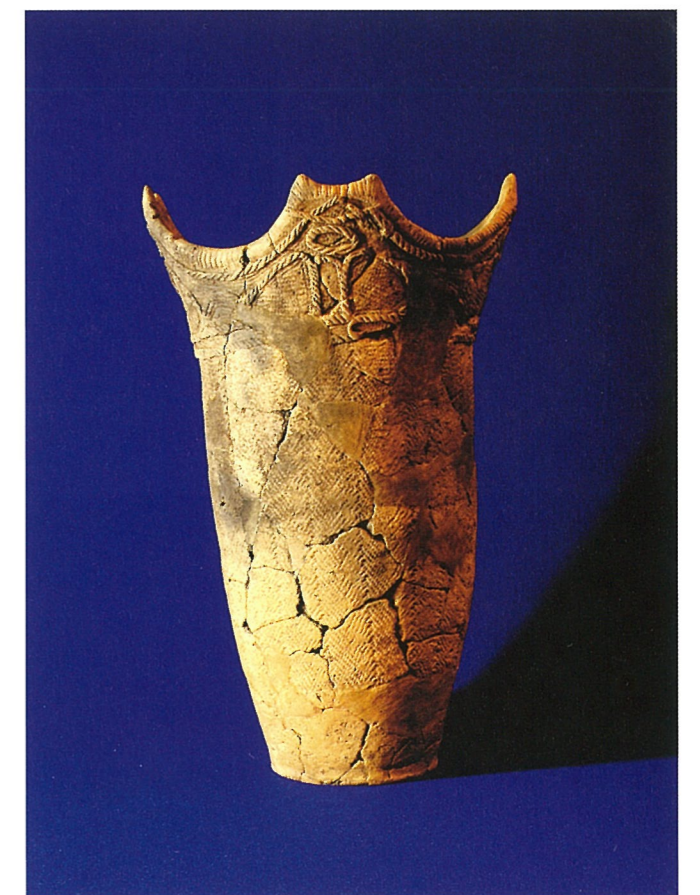


縄文時代中期初頭の大木7a式土器は、繫V遺跡で集落を営み始めた人々が製作した土器である。遺構の多くは、後の大木8a~9式段階の遺構によって失われているが、遺物包含層と呼ばれる当時の「捨て場」から大量の土器・石器が発見されている。その総数は大きなコンテナ箱700箱以上になり、集落では活発な生活が営まれていたと推測される。

写真の土器は、弁状突起を持つ深鉢で、4単位の波状口縁を呈する。写真の土器のように、縦方向の隆線を基本とし、左右、襷状に展開させる文様は中期初頭から前葉の土器で顕著に見られ、古い土器ほど直線的で、新しくなるにつれ曲線的になるようである。なお、このように口縁部が大きく開き、胴部が細くなる深鉢形土器はキャリパー形深鉢と呼ばれ、大木7a・7b式段階では口縁部が直線的に大きく開くが、後続する大木8a式段階になると緩やかなカーブを描いた、丸みを帯びた形状となる。

深鉢形土器 (大木7a式併行)

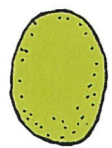
弁状突起を持ち、4単位の波状口縁を持つ。口縁部文様帯には縄文原体を密に押圧した隆線を、襷状に突起下に貼付する。隆線に縄文原体を密に施す文様手法は、北の円筒式土器で多く見られる手法で、実際に繫V遺跡では数多くの円筒式土器が発見されている。このことから、円筒式土器の文様手法を取り入れた土器も作られていたことであろう。しかし、地文の施し方が大木式は縦方向が多いことに対し、円筒式は横方向が多い。写真の土器は縦方向の羽状縄文であることから、円筒式的手法を取り入れた大木式土器とも言える。このような土器は「折衷土器」と呼ばれ、異なる土器文化を対比させる上で重要な土器である。



高度な石材加工技術

繫遺跡は、重要文化財に指定された7個体の土器をはじめとした、数多くの美しい土器が発掘されたことで有名な遺跡です。しかし、繫遺跡は土器だけでなく、石器を作る技術が高度に発達した「むら」だったことが発掘調査で明らかにされています。その背景には、遺跡周辺で容易に採取できる頁岩、玉髄、流紋岩、安山岩が豊富なことにあります。発掘調査では、完成された石器や用途がはっきりしない石製品が数多く発見されています。

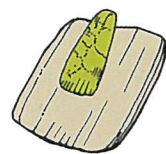
磨製石斧の製作工程（剝離成形）



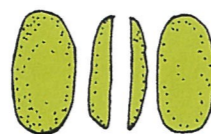
1 素材となる石材を採取します。繫遺跡の縄文人は、雫石川にある凝灰岩や、北上高地より産出する蛇紋岩や緑色岩も斧の素材にしていました。



3 縁辺から敲石で打撃を加え（剝離成形）、大まかに石斧の形をつくっていきます。



5 砥石で全体を研磨します。研磨は、砂質の荒い砥石で細かな凹凸をなくし、徐々に目の細かい砥石で研磨したようです。なお、松や杉などの木材や樹皮に、油を垂らしながら研磨すると強い光沢が現れます。



2 採取された石材をそのまま加工することもあります。多くは縦半分に割り、素材としたようです。



4 剝離によってできた稜を細かく敲石で潰し（敲打）、全体の凹凸をなくし、丸みを帯びた形にします。



6 完成。



大小の砥石

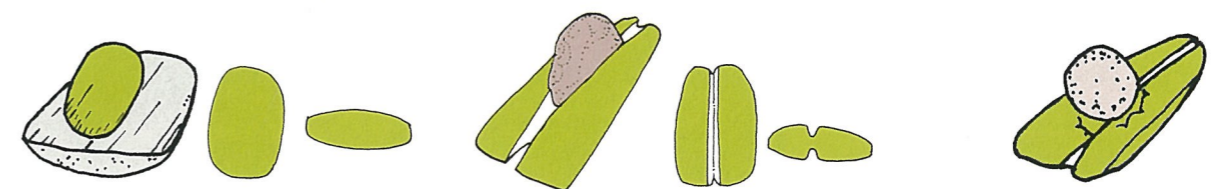


剝離成形による磨製石斧

注目されるのは、完成品を遥かに上回る製作途中に生じた石片や未完成品、加工用の道具と思われる石器の数々です。繫遺跡では、割って作る「打製石器」だけでなく、斧など石を研磨して作る「磨製石器」も多く作られていました。その技術は、実用的な道具だけでなく、装飾品を作ることにも応用されていました。

ここでは、繫遺跡の縄文人達が持っていた磨製石器の製作技術を紹介します。

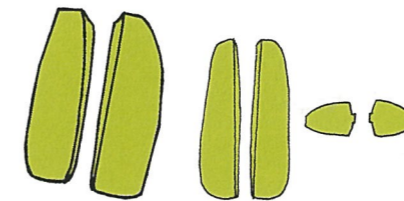
磨製石斧の製作工程（擦切技法）



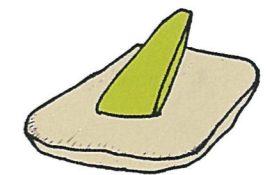
1 板状・偏平な石材を先端が刃状になるように大まかに研磨します（繫遺跡では研磨しないものもある）。

2 研磨した石材に「擦切具」を使用して裏・表に深い溝を彫ります。

3 溝を彫ることによって目的の形状に割れやすくなります。敲石等で衝撃を加えて石材を分断します。



4 溝が多いほど、分断数が多くなり、同じ大きさの石器が得られやすくなります。繫遺跡では、2本以上の溝が彫りこまれたものは確認されていません。分断された面は「凸」状となり、刃部は扇を横にしたような形状になります。



5 全面を研磨して完成です。



擦切技法による磨製石斧



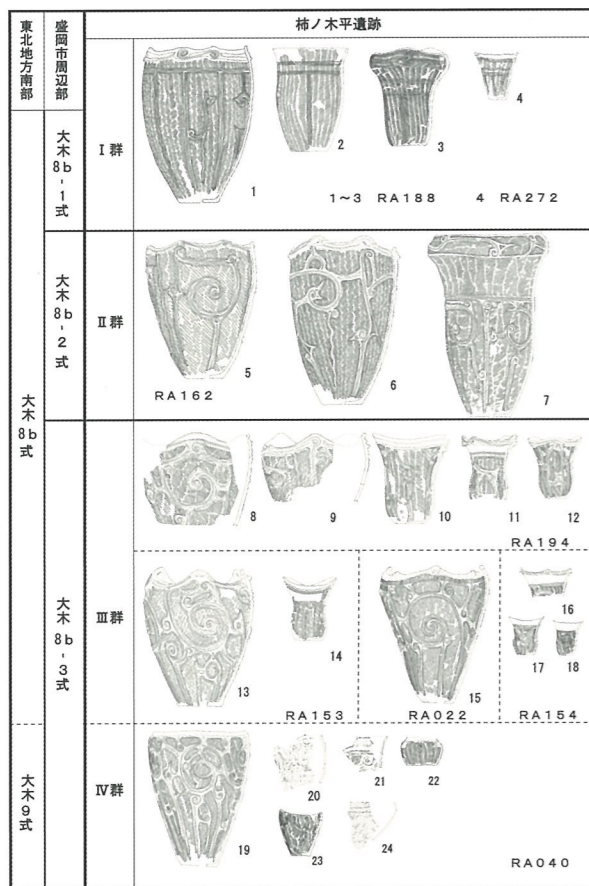
ヒスイ大珠に残る「擦切痕」



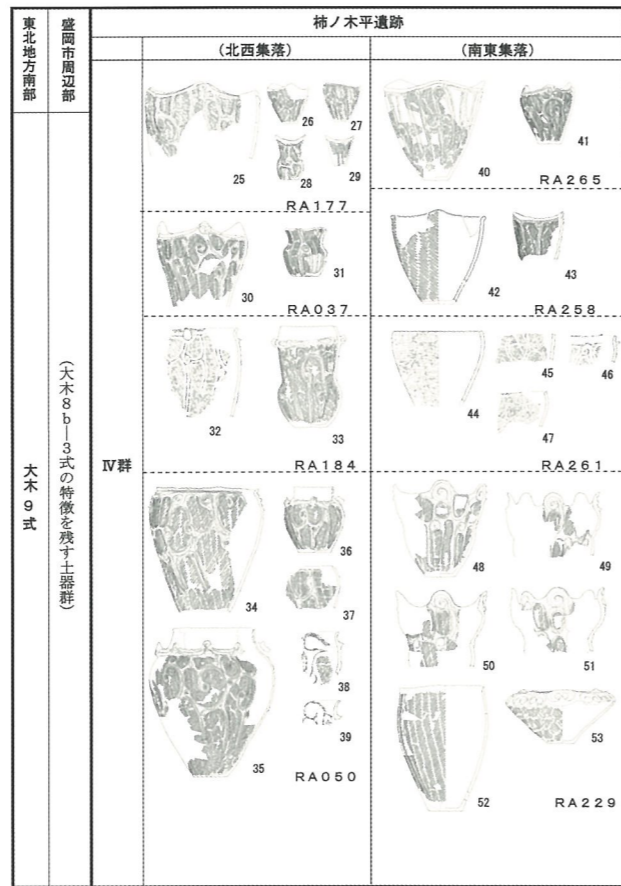
擦切るための石器（擦切具）

繫遺跡では、擦切技法と呼ばれる技術で製作された磨製石斧が数多く発見されています。完成品だけでなく、未完成品や製作中に割れて廃棄されたものなど様々です。このような資料が発見されたことによって、繫遺跡の縄文人たちが擦切技法を担う人々であったことがわかり、その技術は装飾品を作ることにも発揮されました。

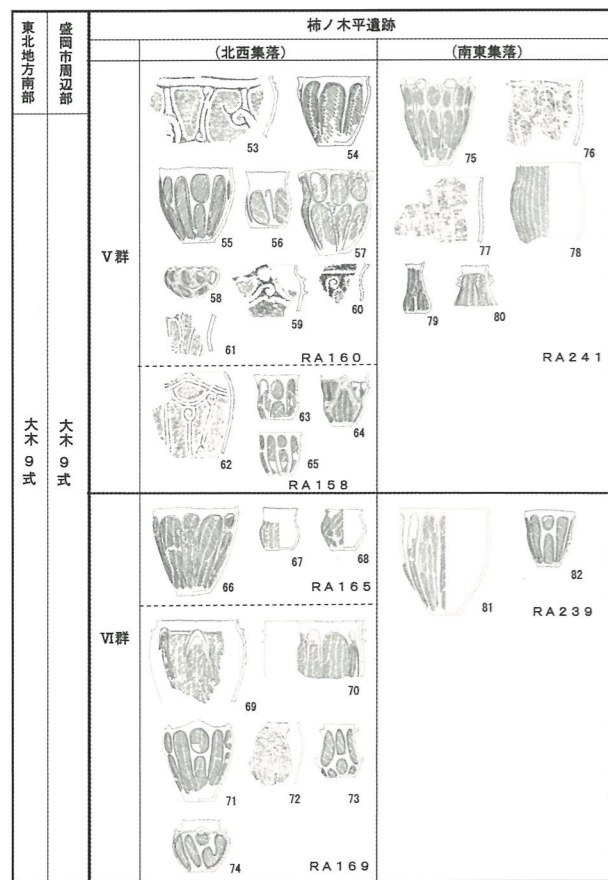
盛岡市内で、擦切技法による石器生産を行っていた証拠を残す遺跡は、繫V遺跡のみです。



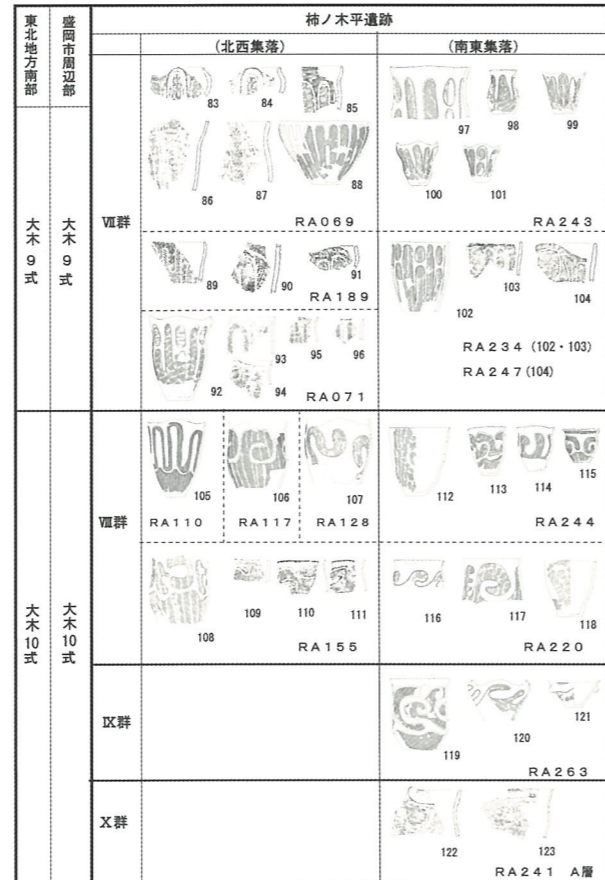
第9図 柿ノ木平遺跡土器変遷図1



第10図 柿ノ木平遺跡土器変遷図2



第11図 柿ノ木平遺跡土器変遷図3



第12図 柿ノ木平遺跡土器変遷図4

以上のように盛岡の縄文時代中期土器の研究史を概観してきたが、昭和30年代の小規模な発掘調査から始まった研究も、現在の大規模発掘調査で得られた膨大な資料の前では微々たる資料にしか見えないかもしれない。しかし、僅かな資料を厳密に観察し、数少ない情報を余すことなく調べ抜いた過去の研究は、鋭い指摘に溢れ、今なお色あせることのない研究である。

草間俊一・吉田義昭の両氏は、昭和30年代に盛岡及び周辺地域が大木式土器文化圏と円筒式土器文化圏の接触地域であることを山内清男博士に教示されて以来、土器編年の構築を進めていた。それは各論文、報告書等の記述で明らかである。両文化圏の接触地域という特別な地域の土器編年を明らかにし、宮城県や青森県など周辺地域、関東地方との併行関係を探る編年の構築は特筆されるべき作業であった。(神原雄一郎)

※ 第9～12図は柿ノ木平遺跡で発掘された竪穴建物跡の切り合い関係(新しい竪穴建物は古い竪穴建物を壊してつくるため、残された土器にも新旧関係がある)、床面に残されたまとまりのある土器を古い順に並べたものである。第9・10図のIV群土器は大きく「IV群」としているが、III群土器に近い土器、V群土器に近い土器でさらに細分した。例として、第9図IV群土器としたRA040竪穴建物跡出土土器は限りなくIII群土器(大木8b式)に近い大木9式土器という見方になる。

【主要参考文献】

- 盛岡市産業文化館1959「畑井野遺跡」
- 吉田義昭1956「甕棺と思われる縄文文化中期の土器群」『石器時代』第3号
- 山内清男ほか編1964『日本原始美術1 縄文式土器』
- 鎌木義昌編1965『日本の考古学II 縄文時代』
- 草間俊一1956「盛岡市史-先史期」『盛岡市史 第1巻(復刻版)』
- 岩手県教育委員会1981「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-VII-」大地渡遺跡
- 盛岡市教育委員会1981「大館遺跡群-昭和55年度発掘調査概報」
- 岩手大学考古学研究会・盛岡市教育委員会1982「柿ノ木平遺跡-昭和50・51年度発掘調査報告-」
- 早瀬亮介, 菅野智則, 須藤隆2006
「東北大学文学研究科 考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料-山内清男編年基準資料-」
『東北大学 総合学術博物館研究紀要5』
- 盛岡市・盛岡市教育委員会2008「柿ノ木平遺跡-浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書IV-」